



市役所ロビーで金栗さんがお出迎え
市役所に金栗さんのエピソードを紹介するPR装飾が登場しました。玉名市・和水町・南関町のゆかりの地や、マラソン大会、エピソード、マップを掲載したパンフレットも配布中！



走って繋いで金栗さんのふるさと玉名をPR
9月29日、福岡 ヤフオク!ドームで開催されたリレーマラソン大会。この大会に、金栗さんのふるさと玉名の「走る広告塔」となるため、市職員が中心の3チーム30人が出場。お揃いのPR用Tシャツに身を包み、たすきを繋いで42.195kmを走り切りました。地下足袋で走った職員は、金栗さんの気分やすごさを味わえたそうです。



お揃いポロシャツで金栗さんPR
「四三」さんにちなんだ背中の「43」が目立つ3色のポロシャツ。市職員がデザインし、「みんなで金栗さんのPRを頑張るぞ!」という気合いとともに職員が着用して業務に励みました。市議会9月定例会の開会・閉会日には市長はじめ幹部職員や市議会議員も着用し、気持ちを一つに全市一丸となってPR。



① 20代半ば、自宅の庭で長男と愛犬と
② 20代後半の夫妻と長男・長女 ③ 30歳頃 ④ 家族写真(6人の子ども、母、夫妻)
⑤ 自宅前の畑で孫とヤギと ⑥ 自宅縁側で



金栗さんが人生の半分、40年以上を過ごした玉名市上小田 金栗さんの思い出の写真と暮らした家をご遺族から玉名市へご寄贈いただきました

金栗さんのマラソン人生を支えた妻スヤ、母幾江、子どもたちと四三さんが暮らした玉名市。今後も金栗さんの功績を多くの人に伝えていきます。



▲金栗さんは22歳の時に池部家の養子となる話がまとまり、石貫のスヤさんと結婚。右は庭先で撮影された家族写真(妻スヤ、妻の弟、四三、母幾江)。



初オリンピックでの敗戦後、マラソン人生を支えた家族

春富村(現和水町)生まれの金栗四三さんは、日本初参加のオリンピック・1912年ストックホルム大会出場後、22歳の時に小田村(現玉名市上小田)の池部家の養子になることになり、春野スヤさんと結婚。オリンピックでの雪辱を誓う金栗さんは、養母幾江や妻の深い理解もあって結婚後も妻を玉名に残し東京でマラソン競技や後進育成に邁進しました。妻や子どもたちは上小田の家で暮らしながら金栗さんを支える時期が続きますが、お互いの近況を手紙や絵はがきで小まめにやりとりしています。1924年パリ大会を最後に競技の第一線から引いた後も、東京で女学校に勤めながらマラソンや女子体育の振興に力を注いだ金栗さん。しかし、長兄の死を契機に39歳で上小田に帰郷、学校対抗のマラソン大会や駅伝競走を企画するなど県内外でマラソン普及に奔走します。その後、幻の東京オリンピック準備のため上京し8年ほど東

金栗さんの活躍や人柄を伝えるゆかりの写真が大量に

玉名市では金栗さんの功績を伝えるべく金栗足袋や写真などの遺品を歴史博物館などで定期的に展示してきました。今夏、さらに写真約800枚がご遺族から寄贈されました。金栗さんのご長男やお孫さんなど家族のアルバムに残されていたもので、陸上競技の場面以外にも家族とつろぐ姿や、旅先での写真など、金栗さんの人柄や生活を伝える貴重な写真の数々です。

日本のスポーツ史の解明にも大きな役割を果たす写真

9月には金栗さんの母校・筑波大学の真田久教授らによって

京で暮らしませんが、53歳で再び帰郷。以後、1983年に92歳で生涯を閉じるまで上小田で暮らしました。人生の半分を暮らした上小田の家も近年は空き家となっていました。大河ドラマを機にご遺族からご寄贈の申し出を受け、家屋と土地を無償譲渡していただきました。今後、市で改修・整備を進め、座敷などを見学できるようにします。

金栗さんとそのマラソン人生を支えた家族の写真や、金栗さん直筆の書、数々のマラソン大会の記念メダルなども展示。また、甘い物好きだった金栗さんになんてお菓子やお茶を楽しめる休憩所も設置する予定です。

▼40代前半、小田尋常高等小学校で小田の子どもたちと



今回寄贈された写真の調査が行われました。オリンピックやスポーツ史に詳しい真田教授の手により、今後詳しい調査が進んでいく予定です。女学校教師時代の女生徒との登山風景や、盲人競走の写真など、女子や障がい者へのスポーツの普及に力を入れていたことを伝える写真が含まれていて、日本のスポーツ史解明にも大きな役割が期待される貴重な資料といえます。

スポーツという言葉もまだ一般的ではなかった時代に、マラソンのみならずスポーツ振興に尽力した金栗さん。マラソン選手としてだけでなく、その教育者としての功績を伝えるため、寄贈された写真や遺品を積極的に活用してPRしていきます。